

令和4・5年度 鹿児島市教育委員会研究協力校 「カリキュラム・マネジメント」

令和5年度 コアスクールプロジェクト ～子供の学びの姿から始まる校内研修推進プロジェクト～

鹿児島市立城西中学校

1 はじめに

学校教育目標「自他を尊重し、夢や志をもち、未来を切り拓く生徒の育成」を実現するために、令和2年度より「キャリア発達」を教育課程のブランディングの視点とし、教育活動を展開している。また、本年度は鹿児島県教育委員会コアスクールプロジェクト指定校として、子供の学びの姿から教職員集団の同僚性を構築し、学力向上へつなげていくために、教科を横断する授業チームを立ち上げ、授業づくりと授業研究の運営に取り組んでいる。本誌は、本校の教職員や生徒がその価値を共有し、主体的に取り組むことで協働性の高まりを見せた実践を紹介している。

2 研究テーマ

立場に立って考え行動できる生徒の育成
～自己のキャリア発達を感じることでできる教育の実践～

3 めざす生徒の姿

「ああ、そうか！」を求めて学び合う生徒
～キャリア発達を促す4つの資質・能力を通して～

4 本校のめざす方向性

(1) キャリア教育

キャリア教育とは、一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通してキャリア発達を促す教育のことである。

ア 社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度

本校の生徒や地域の実態を踏まえ、伸ばしたい資質・能力を以下のように掲げている。また、「学び続けたい」、「働き続けたい」と願い、実現しようとする態度の育成には、「自己肯定感」の高まりが切り離せないものであると考える。

キャリア教育で伸ばしたい4つの資質・能力

- ① 共感力 他者の立場に立って、相手の心情や考え方を感知することができる能力
- ② 思考力 課題や状況を把握し、要因を分析し、解決の手段・方法を吟味する能力
- ③ 段取力 スケジュールを把握し、優先順位、人員の配置・分担を判断する能力
- ④ 対応力 取組を円滑に進めるためのコミュニケーション能力(物言い)や状況に応じて段取りを変更・調整する能力

イ キャリア発達

キャリア発達とは、社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程のことである。

(2) 研究の仮説

これらを踏まえ、本校は令和2年度から研究の仮説を以下のように設定し、実践を重ねている。

「素」の自分ではなく、責任を帯びた「立場」に身を置き、役割を担い、役目を果たす過程を通して、自らのキャリア発達を実感する手立てを工夫すれば、困難を乗り越え、自己実現を目指す意欲や資質・能力を高めることができるのではないか。

ア 「素」の自分ではなく、責任を帯びた「立場」に身を置くとは

「素」の自分とは今の自分のことであり、責任を帯びた「立場」に身を置くとは、学校という社会集団の中で、責任のある「立場」が与えられることである。

イ 役割を担い、役目を果たすとは

「役割」は役目のために割り当てられている仕事を、「役目」は任されている仕事の意義や意味を表している。

ウ 自らのキャリア発達を実感する手立ての工夫とは

日頃から、教師はファシリテーターとして生徒が主体的に活動できるように、生徒の実態に応じた声かけ等の支援を行っている。また、生徒に変容が見られた際は、称賛し、次のステップを踏み出せるような関わりを心がけている。

(3) コアスクールプロジェクトとの関係（協働性）

コアスクールプロジェクトのねらいは、生徒の姿から教職員が研修を深め、指導に役立てることと教職員における同僚性の高まりである。ここでいう同僚性とは、佐藤(2012)によると、同僚（教育の専門家）として学び合う関係である。また、「中学校キャリア教育の手引き」（文部科学省）には、研究の仮説に基づいた取組を行う上で、次の2つの大切さについて書かれている。

- ・ 活動を通して、他者や社会に関わり、その関わり方の違いが「自分らしい生き方」になっていく。
- ・ 一人一人の能力や態度、資質は、段階をおって育成されることをよく理解しておくことが大切である。

つまり、資質・能力の高さや高まり方は生徒一人一人異なっており、集団の中で協働的に学ぶことで、キャリア発達が促されるということを示唆している。生徒集団だけでなく、教職員集団においても協働的に学ぶことで、相乗効果が生まれ、より教育効果が高まることから、本研究は立場における「生徒の協働性」と「教職員の協働性」に着目している。また、生徒一人一人の資質・能力を知るために、教職員は生徒をよく観察することが大切である。

以上のことから、コアスクールプロジェクトにおける教職員同士が尊重し合い、協働して研修を深めていけるような組織づくりや、授業参観時に一人の生徒に一人の参観者が付き、生徒のありのままの姿を観察し、その生徒の姿から教職員が研修を深め、共有していく取組が、本研究を大きく支えるものとなっている。

5 取組の実際

(1) 令和2年度から継続している実践

ア 「一人一役」を大切にしたオリエンテーション

年度初めにオリエンテーションを全校生徒一斉に実施し、学年に応じたねらいや一年間の流れを共有している。下の図は配布資料の一部である。全校生徒が責任を帯びた「立場」に身を置く取組として、生徒会活動の「一人一役」がある。生徒会は6つの専門部で構成され、専門部ごとに複数の係があり、係は学級の生徒数より多く設定してある。つまり、学級内で生徒は1つ以上の係を選ぶことになる。これが「一人一役」である。例えば、生活部黙想係の場合、生活部の役目は「みんながルールを守り、思いやりの心をもって、楽しい学校生活を送れるような雰囲気をつくる。」であり、これを踏まえた黙想係としての役割は「1分前に呼びかける。」だけでなく、「授業終了時に、次の準備をするように呼びかける。」や「ペアで声かけするように呼びかける。」など、学級の実態に応じて、生徒自ら役割を考え、自分の役目を果たそうとする姿をめざしている。

『なりたい自分』をめざして

『なれそうな自分』を感じよう！

私たちは家族、地域、チーム、職場など、仲間で支え合って暮らしています。無理なことを協力して解決し、困難な状況も団結して乗り越えていくことができます。そのときに大切なものは「共感力」「思考力」「段取り力」「対応力」などです。

その心や能力は、楽な方を選びがちな「楽の自分」ではなく、役割を担い、役目を果たす立場に立った自分として考え、行動する経験を通して養うことができます。

役目は、任されている仕事の意義や意味です。通常の役割以外でも役目として考え、新たに行動することが求められます。

役割は、役目のために割り当てられている仕事です。状況に応じて、内容を変えたり、やり方を工夫したりすることが大切です。

例えば、漢字帳係の場合、役割は、漢字帳を集め、点検し、提出することです。しかし、役目は学級の漢字力を高めることです。漢字帳点検という役割は、目的ではなく手段です。役目の意味を考えると、点検以外にもアイデアが湧くはず。

そうやって、役目の意味を見直し、役割を工夫してください。うまくいかないことを他人のせいにしたり、諦めたりせず頑張ってみると少しずつ自分の気持ちや考え方が変わってきます。

「JOSEI DREAM PASSPORT」は、その変化を自分で感じるための記録です。「変わっていく自分」、「なれそうな自分」を実感してください。挑戦し、失敗と成功をくり返す経験が、将来に渡る自分の夢を叶えていくことにつながると思います。

「立場に立つ」経験で養いたい力

- 相手の立場に立って、気持ちや考えを思いやる力 共感力
- 課題の要因・原因を分析し、ベストな方法を考える力 思考力
- 取組の順序と日程、人数配分や分担を計画する力 段取り力
- 状況に応じて、計画を調整・変更する力（+物言い） 対応力

・役目の意味を考えて、役割を工夫しよう！

役目や役割を発揮する主な活動

三大行事	会場コンクール	体育大会	文化祭
	実行委員会（企画・運営）		
体験活動	歌づくり	選挙	役員
	演劇・音楽・パフォーマー	応援団	舞会発表
	作品発表	探求発表	
生徒会活動	1年招初学習	2年修学旅行	3年職場体験学習
	計画づくり、グループ活動（企画・運営）		
教科の学習	学級協議会＋学級運営委員会	本部＋専門委員会	
	協同学習（グループ活動、チーム活動）	遠征	
日々の活動	給食係	日誌	紙制書製作
	地域行事	校次の運動会	地域貢献活動（会場設営、参加）

キャリア教育のオリエンテーションで使用する資料の一部

3

イ 本校独自のキャリア・パスポートとキャリアアンケート

これらは、生徒自身が価値の変容やキャリア発達を感じることでできる内容になっており、教師が生徒の振り返りを見取り、今後の指導に生かすこともできる。このように、生徒がキャリア発達を実感できるように内外からのアプローチを工夫している。

生徒が記入したキャリア・パスポートの一部

＜係活動編＞		自分が考える係の役割	工夫したい役割	工夫したことや、がんばったこと	自己評価	次の活動に向けて
柏葉C	生活	数学で必要なものをみんなにきちんと正確に伝え、志し物をしないうつに呼びかけを子ども。	必要はものを伝えたりはなく、「休み時間のうちに用具は用意」ということを呼びかけてほしい。	教科運搬を忘れないようにメモをしたり、あらかじめ確認したりして来た。	○ ○ ○ ○	自分の係の活動に責任を押しつけたり、気が持たないものにしてしまいたいと思う。
	前期 数学 教科から係					

生徒が学級の中での「立場」を振り返り、価値を見出すことができる。

生徒が自分自身のキャリア発達を感じることができる。

次へのステップ。

キャリアアンケート

JOSEI Careea Self Assessment (自己評価表)											
()年()組()番 氏名 ()											
番号	付けたい力	具体的な力	日				達成度 (自分で考えていることとどうもできていないこと)				
			①	②	③	④	～20%	～40%	～60%	～80%	～100%
1	共感力	自分が任された役割や係について、自ら仕事や役割を見つけ、周りとの協力しながら取り組むことができる。	①	月	日						
			②	月	日						
			③	月	日						
			④	月	日						
2	共感力	相手と自分の考えが異なる時、自分の主張にこだわって対立するのではなく、まずは相手の気持ちや考えを受け止め、お互いの意見や解決方法を調整することができる。	①	月	日						
			②	月	日						
			③	月	日						
			④	月	日						
3	思考力	分からないことやもっと知りたいことがある時、資料や情報を収集したり、知っている人を探したりして、多くの情報を集めて判断することができる。	①	月	日						
			②	月	日						
			③	月	日						
			④	月	日						
4	思考力	問題や課題が生じているとき、まずは要因や原因を調べ、その解決に一番合った方法を話し合っ解決することができる。	①	月	日						
			②	月	日						
			③	月	日						
			④	月	日						
5	段取力	自分が任されている仕事や係活動について、スケジュールを考えて、仕事の順番や分担の仕方などの計画を立て、見直しをもって進めることができる。	①	月	日						
			②	月	日						
			③	月	日						
			④	月	日						
6	段取力	課題やテーマを追究する時、取り組むべき順番を判断したり、効率的な仕事の分担方法を考えることができる。	①	月	日						
			②	月	日						
			③	月	日						
			④	月	日						
7	対応力	仕事を進める上で問題が起こった時、やり方を変えたり、新たな方法で取り組んでみたり、解決方法を改善することができる。	①	月	日						
			②	月	日						
			③	月	日						
			④	月	日						
8	対応力	協力関係がうまくつけない場合に、相手が理解しにくい伝え方を考えたり、受け入れやすい方法を工夫したりすることができる。	①	月	日						
			②	月	日						
			③	月	日						
			④	月	日						
9	自己肯定感	役割や役目を果たす経験を通して、自分の良さに気付いたり、課題を見つめたりして、もっと成長していこうという意欲をもつことができる。	①	月	日						
			②	月	日						
			③	月	日						
			④	月	日						
10	自己肯定感	自分が任されている仕事や係活動について、その役割や立場に立って考え、判断し、意見を述べたり、行動したりしようとするすることができる。	①	月	日						
			②	月	日						
			③	月	日						
			④	月	日						

(2) 立場における生徒の協働性

ア 行事における取組

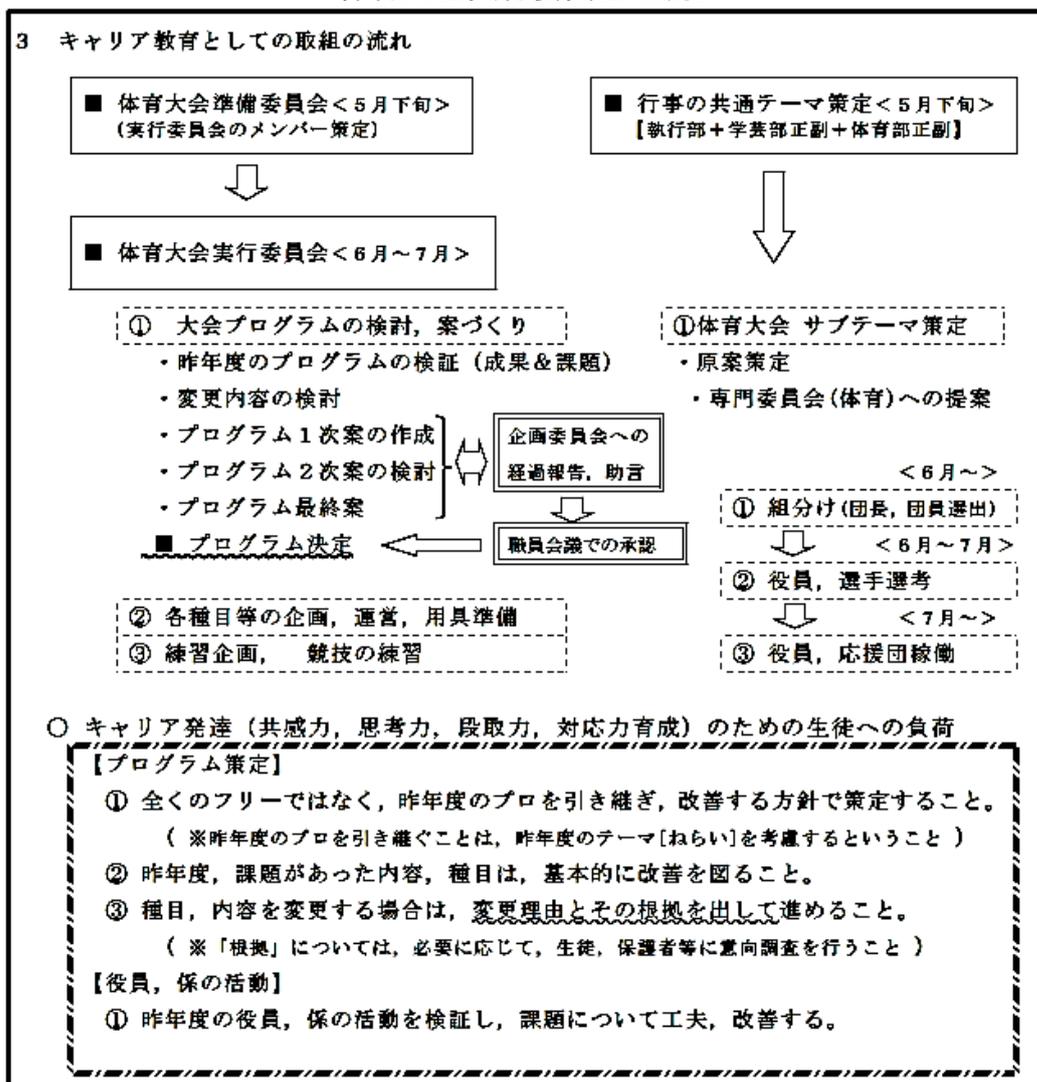
合唱コンクール、体育大会、文化祭は共通テーマで結ばれ、いずれも実行委員会を立ち上げ、生徒が主体的に議論し、企画・運営に携わっている。大会開催に向けた課題解決を通して、生徒が自身のキャリア発達を実感することがねらいである。

本年度は、特に、「体育大会を半日開催にするか一日開催にするか。」について様々な視点から協議がなされた。実行委員を中心に、事前練習や大会を運営することで、全校生徒の心が一つになり、感動的な体育大会になった。生徒たちが本気で行事をつくり上げ、成功させようという気持ちは、相手の立場に立って考え、判断する姿として表れている。



体育大会実行委員会の様子

体育大会実行委員会の流れ



【プログラム策定】

- ① 全くのフリーではなく、昨年度のプロを引き継ぎ、改善する方針で策定すること。
(※昨年度のプロを引き継ぐことは、昨年度のテーマ[ねらい]を考慮するということ)
- ② 昨年度、課題があった内容、種目は、基本的に改善を図ること。
- ③ 種目、内容を変更する場合は、変更理由とその根拠を出して進めること。
(※「根拠」については、必要に応じて、生徒、保護者等に意向調査を行うこと)

【役員、係の活動】

- ① 昨年度の役員、係の活動を検証し、課題について工夫、改善する。

文化祭は、令和2年度から展示の方法を見直し、全学年でポスターセッションを行っている。ポスターセッションでは、数人の小グループを複数構成し、一人一回は必ず発表できるような機会を設けることで、他人任せでない主体的な取組が見られる。また、「どのように工夫したら伝わりやすいか」、「どのような言葉なら分かりやすいか」といった立場で考える必要があり、従来の展示にはないプレゼンテーションを行っている。



ポスターセッションの様子

イ 学級運営委員会

生徒会活動の一環として、学級運営委員会を隔週の放課後に実施している。委員は学級の総務、副総務、各専門部の部長、副部長で構成され、学級の課題に本音で対話し、その要因を共感的に受け止め、大切にしていきたいことや、めざす学級の姿を生徒と教師が共有している。これまでに「忘れ物を0にする」や「学校に登校しやすい雰囲気づくり」など、真剣に話し合い、生徒による学級づくりを展開している。



学級運営委員会の様子

学級運営委員会のあり方について

■学級運営委員会のねらいと 教師の役割

教師の価値観と生徒(学級集団)の価値観を照らし、「めざしたい学級」へのコンセンサスをつくる自由な話し合い【価値観を共有していく場】

- ① 学級の問題点を指摘・議論し、解決案を検討して学級会に提案することをねらいとしたものではない。
(生徒の自発的な提案によって、そのパターンも出てくる場合もあるが、運営委員が管理的に取り仕切る状況は避ける。)
- ② 教師はファシリテーターの立場で、自由に話し合える雰囲気づくりを行い、生徒の素直な思いや、率直な意見をより多く引き出すことが役割となる。 困り感や弱さを楽しみながら、教師も自分の思いを語ることも大切である。
- ③ 人権に関わる発言や短絡的な発想には、指導的な立場で臨むことも必要であるが、不平不満も受け止めながら、「めざしたい学級」を語り込む。
- ④ 話し合いの回数を重ねながら、「こうあるべき、そうすべき」的な論調ではなく、「こうなりたい、できるといいね」というような視点で、対症的な課題解決ではなく、要因や根本的な問題に踏み込むコーチングを心がける。
- ⑤ 学級のリーダー的存在の運営委員が、同じ方向で結ばれていることの意義を理解させ、そのための自由な話し合いが無駄なことではないことを共有する。
(※部活動の顧問は、部員が学級運営委員会のために部活動への参加が遅れることや練習メニューの配慮もあることについて、他部員へ理解させること。)

学級運営委員会の共通理解事項

ウ 縦割り清掃

教室以外の全ての清掃場所は、異学年集団で清掃を行っている。リーダーは、清掃前に清掃場所の指示や清掃の進め方の確認を行い、清掃後は振り返りシートを使って、ミーティングを実施し、出された意見は次回の清掃に生かしている。



清掃後のミーティングの様子

(3) 立場における教職員の協働性

ア 学年チーム担任制

学年チーム担任制とは学級担任を固定せず、学級における生徒の指導や事務等の業務を複数の教員がローテーションで担当する学級運営の方法である。下記のねらいのもと、学年全ての教職員が、基本学級担当教員【Basic Teacher】、主担当教員【Main Teacher】、サポート担当教員【Support Teacher】の3つの役割を担い、協働的に業務にあたっている。

ねらい

- ・ 教職員が多面的な視点で生徒と関わり、生徒の変化に気付く機会を増やす。
- ・ 多くの教職員との活動や対話を通じて、生徒の多様な能力の伸長を図り、健やかな成長につなげる。
- ・ 教職員が連携・補完することによって、指導力の向上および組織力の強化を図る。

学年チーム担任制の概要

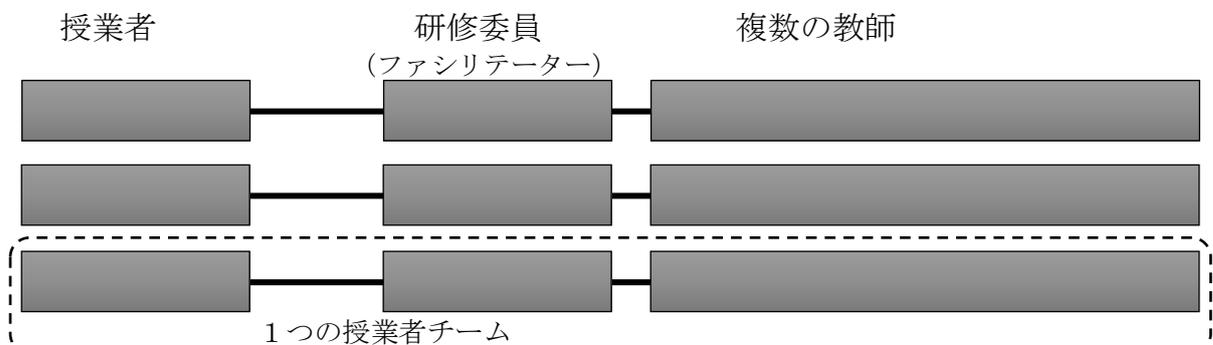
- ・ 3～4学級を1グループとして、5～7人程度の教員でチームを編成する。
- ・ 従来の学級担任の業務は、チームでローテーションや分担をして担当する。
- ・ 道徳と学活の授業は、学年の教員でローテーションをして担当する。
- ・ 生徒指導等の案件に対しては、状況に応じて弾力的にチームを編成して対応する。
- ・ 教育相談は、生徒や保護者の希望を聞いて担当教員を割り当てる。
- ・ 生徒の主体的な学級づくりを進めるために、学級運営委員会を設置する。

イ 授業研究における職員研修（コアスクールプロジェクト）

職員研修の一環として、年に二回、3つの教科で授業研究を行い、全ての教員が参加し、研修を深めている。生徒の学力を向上させるために、「教師集団の同僚性を構築するための組織づくり」や「教科の枠を超えた教師一人一人の学び」、「生徒一人一人の姿から学びを深めていく授業研究」に取り組んでいる。

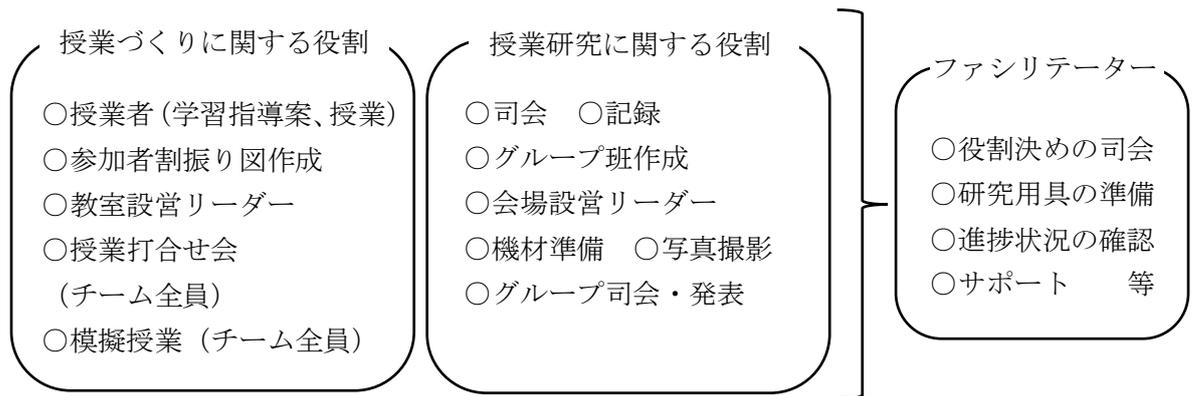
(ア) 授業者チームにおける組織

授業者に対して、研修委員や教科の異なる教師が一つの授業者チームになっており、以下の図のように構成されている。合計3つの授業者チームがあり、全ての教師がそれぞれの立場を担っている。



授業者チームにおける組織図

授業者チームの中でも、それぞれに役割があり、チーム内で連携しながら役目を果たしている。また、全てのチームが同じ組織図であるため、チーム間で連携しながら、よりよく研修を進めている姿が見られる。



授業者チームにおける役割

(イ) 授業づくりの流れ

以下のような日程で、各チームが準備を進めている。

【1か月前までに】

- ・ 授業者による学習指導案の作成
- ・ 授業者チーム内での役割決め



授業者チームによる授業打合せ会

【1か月前】

- ・ 教科による学習指導案検討会
- ・ 授業者チームによる学習指導案検討会
- ・ 授業者チームによる授業打合せ会
(学習課題等の教材の議論)



研究授業の様子

【3週間前】

- ・ 管理職による学習指導案の確認
- ・ 指導助言者への学習指導案の提出

【1週間前】

- ・ 授業者チームによる授業打合せ会
(模擬授業や授業撮影動画による議論)
- ・ 参加者割振り図やグループ班の作成



授業研究の様子

【当日】

- ・ 会場設営や機材等の準備
- ・ 授業研究の運営

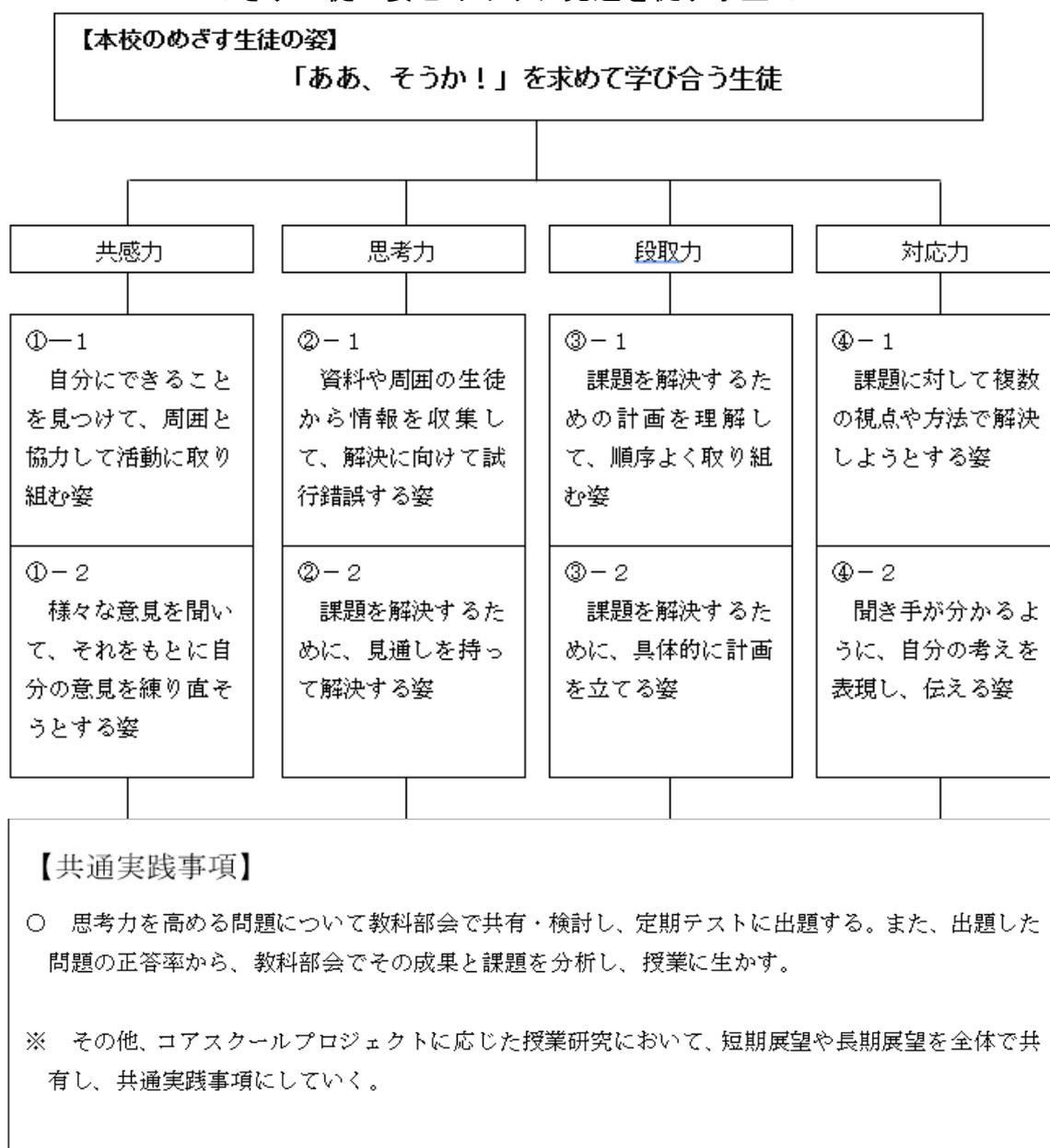
(ウ) 授業における「学び合い」の充実

コアスクールプロジェクトでは、生徒の姿から議論する授業研究にしていくために、授業における「めざす生徒の姿」を設定しており、本校は、「ああ、そうか！」を求めて学び合う生徒」を念頭に置いて授業づくりを行っている。

キャリア教育において、本校が定める4つの能力（共感力、思考力、段取力、対応力）を、具体的に表したものがキャリアアンケートに記載してある8項目である。これについて、授業でめざしたい生徒の姿として表現したものが、下の図の8つの姿であり、これらの姿を表出させるための手立てが、授業における「キャリア発達を促す手立て」である。

キャリア発達を促す手立てを授業に取り入れることで、資質・能力の高まりが期待でき、めざす生徒の姿につながっていくものと考えている。

めざす生徒の姿とキャリア発達を促す手立て



本校は、独自の学習指導案様式（城西スタイル）を作成し、教育課程に位置付けている。この様式を使って授業をすることで、指導者のねらいや手立てがより明確になり、しかも気軽に授業を準備することが可能になっている。今回の研究公開でも、城西スタイルを使った学習指導案を作成している。以下の図は、めざす生徒の姿とキャリア発達を促す手立てを取り入れた学習指導案である。



観望	観望	観望	観望
観望 1	観望 2	観望 3	観望 4
観望 5	観望 6	観望 7	観望 8
観望 9	観望 10	観望 11	観望 12

めざす生徒の姿

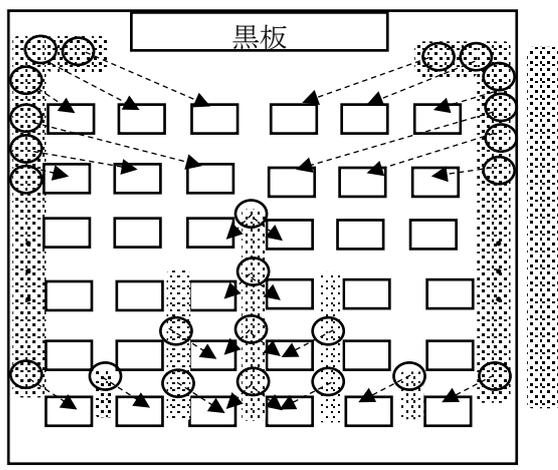
段取り力：③—1

「段取り力③—1の姿」をめざして、「発表者には課題解決の理由を1分で説明するよう伝えておく」という手立てである。生徒は限られた時間で分かりやすく伝えるために、班員の考えを順序立てて整理するという能力の高まりが期待できる。

学習指導案様式（城西スタイル）

(エ) 授業参観と授業研究

授業参観は原則として、一人の生徒に一人の参観者が付き、生徒のありのままの姿を観察し、参観シートに記録していく。特に、「ああ、そうか！を求めて学び合う姿が見られたかどうか」や「キャリア発達を促す手立ての有効性」については注意深く観察する。また、観察時は生徒のつぶやきや表情の変化を見取るために、観察する位置は大切である。



○は参観者、矢印は観察の向き、網掛けは生徒の妨げになりにくい範囲を表している。

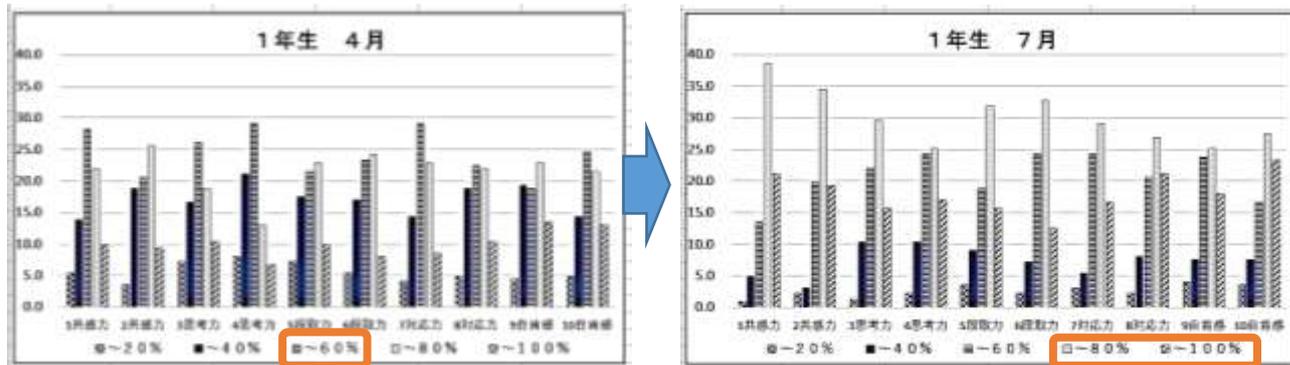
一斉授業時の参観者の観察位置

授業研究は、生徒が授業で作ったグループと、同じグループになるようにして実施している。「生徒の姿」と「教師の手立て」について書いた2種類の付箋を使い、広幅用紙上で、「ああ、そうか！」や「学び合う」姿が見られた場合とそうでない場合に、分類していく。見られなかった理由について、生徒の立場になって考え、解決に近づくための手立てと組織における展望を明確にしていくものである。

6 成果と課題

(1) 令和5年度キャリアアンケートの結果

下図は、4月と7月に、1年生に実施したキャリアアンケートの結果である。本校が定める4つの資質・能力（共感力、思考力、段取力、対応力）と自己肯定感の10項目全てにおいて、達成度の最頻値は「40%～60%」から「60%～80%」へ大きくなっており、また、グラフは達成度の高いほうへ推移していることが分かる。この結果は、2年生や3年生においても、同様の傾向であった。



(2) 学校評価アンケート（令和5年度と令和4年度の比較）

下図は、本年度と昨年度の7月に実施した学校評価アンケート結果の一部である。No. 1のアンケートは、教職員の研修やキャリア発達を促す手立て（共感力や思考力）に関連した内容、No. 2のアンケートは、研究の仮説に基づいた取組そのものを評価した内容である。保護者、本校教職員ともに、「そう思う」や「まあそう思う」が増加し、「そう思わない」や「あまりそう思わない」が減少していることが分かる。

NO	質問	回答	R4保護者	R5保護者	R5-R4 (保護者)	R4職員	R5職員	R5-R4 (職員)
1	思考力・表現力を伸ばすため、協同学習など指導法改善に取り組んでいる。	4	12.2	16.0	3.8	21.9	25.6	3.7
		3	73.2	77.2	4.0	68.8	64.1	-4.7
		2	13.2	5.6	-7.6	9.4	10.3	0.9
		1	1.4	1.3	-0.1	0.0	0.0	0.0
2	キャリア発達の視点で生徒主体の教育活動を工夫し、個々の資質・能力を育てている。	4	29.7	34.8	5.1	21.9	23.1	1.2
		3	62.2	61.0	-1.2	59.4	61.5	2.1
		2	7.0	3.7	-3.3	18.8	15.4	-3.4
		1	1.1	0.6	-0.5	0.0	0.0	0.0

記述アンケートには、「自分の経験から、相手の立場に立って物事を考えられるようになった。」という生徒の意見や、「キャリア教育を柱とした種々の取組が、生徒の資質・能力を高めていると感じる。」という教師の意見があり、資質・能力が向上したと実感している姿が見られた。

(3) 成果と課題

上記の各アンケートの結果や記述、行事等の生徒の姿から、研究の仮説に基づいた取組を行うことで、ほとんどの生徒は資質・能力及び自己肯定感が向上したと考えられる。また、生徒や教職員の協働性は、ほとんどの実践において高まりを見せた。これらの成果は、生徒の学力向上に大きく寄与するものであり、今後のさらなる成長が楽しみである。しかし、キャリアアンケートの結果から、達成度の低い生徒が数人いるという現状もある。個別指導や個別最適な学び、そして、生徒の自己肯定感の高まり方においても研修を深め、実践していきたい。